
褥の墓場

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

褥の墓場

【Nコード】

N8772H

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

何年も床にしている詩人。彼が最後に思い書こうとしたものは。詩人ハイネの最期を書きました。彼は晩年は何年も床にありました。

第一章

褥の墓場

彼はそこにいた。長い間そこにいた。もうどれだけいるのか。七年だったか。覚えてもいられなくなっていた。

左目も見えなくなり立てなくなった。そうして身体を蝕む激しい痛みに耐えながら今人を呼んでいた。

「誰か。来て」

彼は言いながらベルを鳴らしていた。

「誰か。早く」

程なくその部屋に人が来てくれた。家の使用人と年老いた男が。年老いた男を見て彼は少しだけ笑顔になった。その痩せて瘡だらけになった顔で。

「叔父さん」

「どうかしたのか？」

叔父さんと呼ばれたその男は彼を心配する顔で扉から見て問うた。

「一体何か用か？何でも言ってみてくれ」

「紙が欲しいんだ」

彼は力ない声で叔父に告げた。壁と天井のほかは何もない部屋。

ベッドだけがある部屋の中で。そこに来てくれた叔父に対して言ったのだ。

「紙がね」

「紙か」

「うん。あと鉛筆をね」

それも頼むのだった。

「欲しいけれどいいかな」

「そうか。紙と鉛筆か」

「久し振りに書きたくなっただんだ」

微笑みもまた力ないものだった。しかしそれでも微笑んだのだ
た。

「だからね。いいかな」

「それでしたら私が」

「いや、いい」

老人は自分が行こうとした使用人を止めたのだった。

「それは。いい」

「宜しいのですか？」

「言っていた筈だ」

そしてここで使用人に対して告げるのだった。

「ハインリヒの世話は私がするとな」

「左様ですか」

「だからいいのだ」

あらためて使用人に対して告げた。

「ハインリヒに関してはな」

「はい。それでは」

「ではハインリヒ」

老人は使用人に話したうえであらためて彼に顔を向けた。その声は老人にしてはやけに高くそして何処か声色の感じがする声ではあつたが。

「少し待っていてくれ」

「うん。待たせてもらうよ」

彼はその力ない微笑で叔父の言葉に頷いた。

「少しだけだしね」

「そうだ。少しだけ頑張ってくれ」

老人は今度はこんなことを言うのだった。

「少しだけな」

「叔父さん、いつも有り難う」

彼は老人の言葉を聞いて静かに微笑んで述べた。

「僕の為に色々としてくれて。昔から」

「甥だ」

老人は言った。

「御前は私の甥だ」

「だからなの？」

「そうだ。大切な甥だ」

甥であるということを強調するのだった。

「大切だからだ。だからな」

「本当に有り難う」

彼はこう言う老人に対してまた礼を述べるのだった。

「本当にね。いつもね」

「いつもじゃない。これからもだ」

過去や現在だけではないのだった。

「これからも私は御前の為にいる。それを忘れないでくれ」

「うん、何があっても忘れないよ」

彼はここでも微笑んで応えた。

「じゃあ。待たせてもらうよ」

「少しだけだからな」

こう言って老人にしてはやけに早く、そうして何処か柔らかい足取りでその場を後にするのだった。そうして暫くして紙と鉛筆を持って戻ってきた。そうしてその上で彼に直接手渡した。その弱々しく今にも崩れ落ちてしまいそうな骨と皮だけになってしまっている手に。

「これでいいんだな」

「うん。久し振りに書けるよ」

彼はここでもまた微笑んで述べるのだった。

「そんな気持なんだ。今」

「気持ちか」

「最後だからね」

微笑は弱々しく、そして何処か儂い。そうしたものになっていた。

第二章

「これが最後だから」

「そうか。最後か」

「叔父さん、御免」

彼は今度は申し訳なさそうに彼に謝ってきた。

「ずっと僕の為に色々してくれたけれど何も返すことはできなくて」

「そんなことはない」

老人は暖かい、その長い睫毛を持つ目で彼に言葉を返した。

「そんなことはない。御前はちゃんと返してくれている」

「そうかな」

「そうだ。ずっと私と共にいてくれた」

「こう言うのだった。」

「それで。返してくれた」

「そんなので返したことになるのかな」

「甥だからな」

またここで甥という言葉を出すのだった。

「その甥が側にいてくれて。何と有難かったことか」

「そんなのでお返しになったのかな」

「お返しはな。自分では気付かないこともある」

老人は今度はこんなふうにも言うのだった。

「そして返していることもあるんだ」

「そういうものなんだ」

「そうだ。御前はそれには気付いてくれなかったな」

「そうだね。今まで気付かなかったよ」

彼は弱々しいがそれでも優しい微笑みにその笑みを変えていた。

「今気付いたかな。じゃあこれから」

「何を書くのだ？」

「叔父さんのこと。書くよ」

言いながらその鉛筆を動かしていく。祿に動かないその手で。

「ちよつと待ってね。書き終わったら叔父さんにあげるから」

「済まないな」

「今まで。叔父さんのことは歌にしたかな」

ふとこのことも思ふ彼だった。

「それはどうだったかな」

「さてな。だが最後は私のものだな」

「うん。じゃあ今書いているから」

右目だけで紙を見ながら必死に書いていた。白い何枚にも重ねられたシーツの上で。鉛筆を進ませてそのうえで書き続けていた。

それが止まった時。彼はまた言った。

「終わったよ。書いたよ」

「そうか。私のことをか」

「今まで本当に有り難う」

ここでも礼を述べる彼だった。礼を述べながら老人に紙を手渡していた。その書かれた紙を。

「本当にね。叔父さん」

言葉はさらに弱々しいものになっていた。今にも消えそうなの。

「先に行ってるから。また会おうね」

「うむ、またな」

老人は遂に彼の言葉に対して俯いてしまった。

しかし彼だけはずっと見続けていた。その目の中で彼は静かにシーツの上に崩れ落ちていった。鉛筆をその手に持ったままゆっくりと。

「お亡くなりになられましたね」

「はい」

使用人に対する老人の言葉遣いがここで急に変わった。

「この方は。もうこれで」

「エリーゼ様」

使用人がここでこの名前を出してきた。

「有り難うございます」

「いえ」

エリーゼと女の名で呼ばれた老人はここで自分の髭に手を当てた。そうしてそれを剥がす仕草をする。すると何とその白い髭が取れてしまった。

そこから姿を現わしたのは麗人だった。麗しい瞳を憂いの色で満たし細い整った顔は悲しみのあまりか白くなっていた。その麗人が姿を現わしたのだった。

「これで。この方が幸せに旅立つことができるなら」

「構わないのですね」

「はい」

また使用人の言葉に対して頷くのだった。

「そうです。私はそれで満足です」

「左様ですか」

「この方が大事に思われていた人」

それが彼の叔父だったのである。

「その方に見届けてもらって。幸せだったと思います」

「ですがエリーゼ様」

使用人はまた麗人に声をかけてきた。

「貴女は。それで」

「いいのです」

しかし彼女はそれをいいとするのだった。

「私はこれで。この方が幸せに旅立てるなら」

「そうなのですか。それで」

「それだけで。ではさようなら」

麗人はその左目から涙を流しながら告げた。

「ハイネ様、これで永遠に」

次に右目から涙を流しそのうえで彼を見るのだった。静かに微笑みそのまま事切れてしまった彼を。涙を流しながら見続けるのであった。

ハインリヒ^{II}ハイネはその叔父に終生庇護されていた。叔父が何かにつけ彼を助けていたからこそ詩人になれたとさえ言える。彼が病で動けなくなつてからも彼を引き取り護り続けた。彼はハイネより先に死んでしまつたがハイネは彼のことを終生愛し続けていたという。そして彼の最後の枕元にはエリーゼという女性が通っていた。彼女のこともまた話に残っている。その愛もまた。全ては愛により残された話である。

褥の墓場

完

2009・4・29

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8772h/>

褥の墓場

2010年10月8日15時04分発行